

のりの思い出

岩淵惠

祖母と私と弟。四歳頃のある冬の日。こたつの上には、色

紙と大和糊。私たちは無心に和バサミの先で、工夫して折りたたんだ色紙に切り込みを入れていた。開く時のうれしさ、そこには思いがけない花型の連続模様があらわれたのだつた。ね、おばあちゃん、見て。すてきすてき。京都弁でいろいろやりとりもあつたろう。桃山の家だった。

色合いのよいもう一枚の紙に、レースをのせるように、模様をつけた紙を大和糊ではる。ボール紙の上で、うすく平均してのりをつけるのは、幼い指にはむつかしい事だった。あつくぬつたり、もたもたしたりすると、切り目からりがはみ出し、色紙のきれいな色がにじんでしまうのだった。ひやっと指に冷たい大和糊、それがすこしあたかくなり、ボコボコしないよう、上から紙で押しながらびっかりはれた時うれしさ。ね、おばあちゃん、見て。すてきすてき。

何枚が出来た頃、祖母が立ち上る。どっこいしょ。さあ、はりましよう。はりましよう。私や弟が遊んで穴を開けた、

あすまや障子に、色紙で修理をするのだ。

色合いを考えて、又ていねいに大和糊をぬる。背のびしてはる。どうこいしょ。祖母は私たちが背のとどかない所に、腰をのばしてはつてくれる。着物の袖でのりをふいてはいけませんよ。ね、おばあちゃん、見て。メミちゃんの作ったの、すてきすてき。オクのもチユテキチユテキ。三つの弟はボクと発音出来なかつた。私のことはお姉ちゃんと言えないでオテーチャンだつた。オテーチャンのもチユテキ。祖母は私たちが下手にはつてもニコニコしていた。ね、おばあちゃん。

夜になると、電燈をつけて、四つと三つのあねおととは、夢心地で、自分たちの作品にみとれるのだった。

なめられる「のり」となめられない「のり」があるのを、幼い頃、よく知っていた。

祖母や、母が「決してなめてはいけません」という「の

り」は、大和糊とアラビア糊で、父の机にある、神秘的な、透明なみどり色の、三角形のアラビア糊は、子どもが使ってはいけませんと言われた。きっと遠い、アラビアという国から、海を渡って来たのにもがいない。父は、あれで何をはるのだろうと思った。時々、そつとさわって見た。今でも、ロマンチックという言葉を聞くと、何故か、あの透明なみどり色のガラスびんを思い浮べる。心の棚にのっているのだろうか。

シタキリスズメ、オヤドハドコダと、一年生の国語の時間にならった。そこには書いてなくとも、舌切雀が、おばあさんの作った糊をなめて、チヨンとハサミで舌を切られたことは知っていた。

勿論、ハサミは和バサミで、祖母や母の裁縫箱にあるのと同じものだと思った。ナメルトハサミデチヨンギルゾ。チヨキン。

勿論「のり」はなめてみた。メリケン粉を水で溶いて、おしゃもじでかきまぜながら煮る。祖母の手もとを見ていると、平鍋の水が半透明にトロリとしてきて、大きな泡が一つ二つ出て来る。アーブクタッタ、ニータッタ、ニータカドーダカナメテミヨ。と口ずさむ頃、火をとめる。

障子張りの時は、この糊を使う。祖母は少し余分を作つて、すこしお鍋に残し、お砂糖を入れて、小皿に入れてくれた。

それでもう、私も弟も舌切雀になつてしまふ。チュンチュン。のりをなめちゃつた。ナメルトハサミでチヨンギルゾ。チュンチュン。もう二匹の雀は夢中になつてしまふ。お皿をなめてしまふと、羽をはやして家中をとびまわる。たちまち、おばあさんと、おじいさんに化ける。タンスから着物や風呂敷をとり出し、押入れから行李をひき出し、おもちゃ箱はひっくり返す。大きいづらがほしいのよ。おぶい紐でしょおうとする。力足りずひっくり返る。たちまち行李の中にもぐり込み、お化けとなつて出なくてはならない。

スズメガノリヲナメチヤツタ。チュンチュン。ナメルトハサミデチヨンギルゾ。チュンチュン。シタキリスズメオヤドハドコダ。

あ、ミニちゃん、あ、ツネちゃん、そんなにさわいではいけません。ふすまを破いちやつてしまあまあ。オバアチャン、ゴメンナサイ。